

加賀市九谷A遺跡の木地師関連資料などの紹介

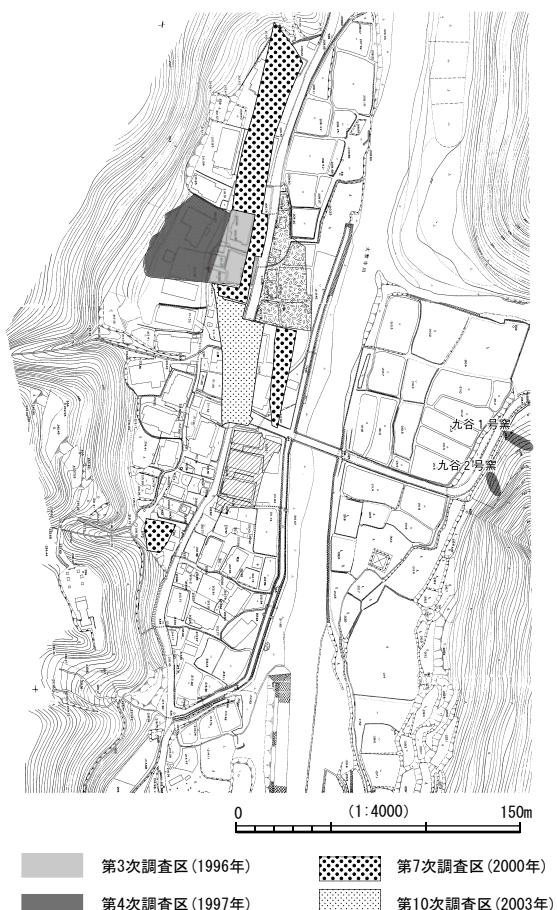
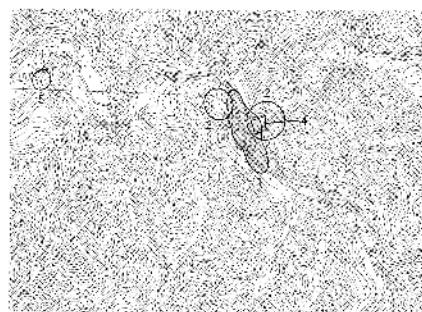
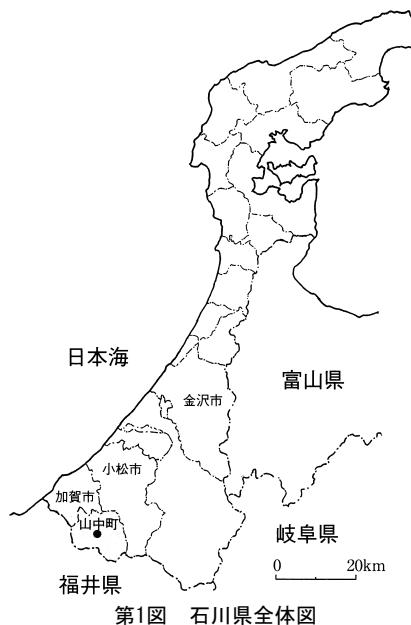
久田正弘

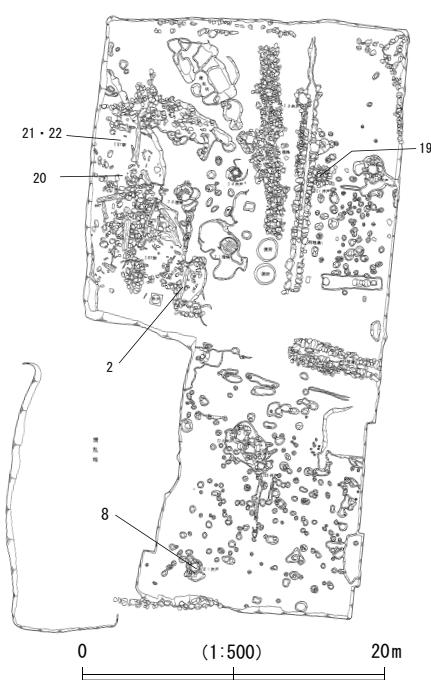
1 はじめに

加賀市九谷A遺跡は、国指定史跡九谷磁器窯跡に近接する遺跡(第1・2図)であり、ダム建設に伴い石川県立埋蔵文化財センターなどが発掘調査を1993～2003年にかけて実施(第3図)し、第1～10次の調査成果が報告された(三浦ほか2005・藤田ほか2006)。その中で木地師関連遺構・遺物がまとめられたが、若干の疑問点を提示したい。また、現在当センターでは報告書刊行済み遺跡の遺物再整理を実施中であり、筆者が令和3年10～12月に担当した九谷A遺跡の未報告木製品(櫛・独楽)を紹介する。

2 木地師の工房

第4次調査IV区の掘立柱建物3(第5・6図)は、3×3間以上(4.6m×5.3m以上)で西側に庇を持つが、建物の北西側は排土の盛土を残したために未調査である。16世紀後半の建物と思われ、内部と周辺には薄い盛土があり、中央に囲炉裏(中央に扁平な石、周辺に越前焼の破片を据え)を持ち、西・南側をL字状の溝が巡る。囲炉裏・溝周辺から、鉋砥石や皿の荒型が出土(第6図)していることから、木地師の工房とされた。溝の南西コーナーには、荒型や荒い加工の木片が多数出土している。建物床面には炭化物混じりの黒色土層で覆われており、周辺の溝内には炭化材が多く認められた。また、IV区下層井戸状遺構では

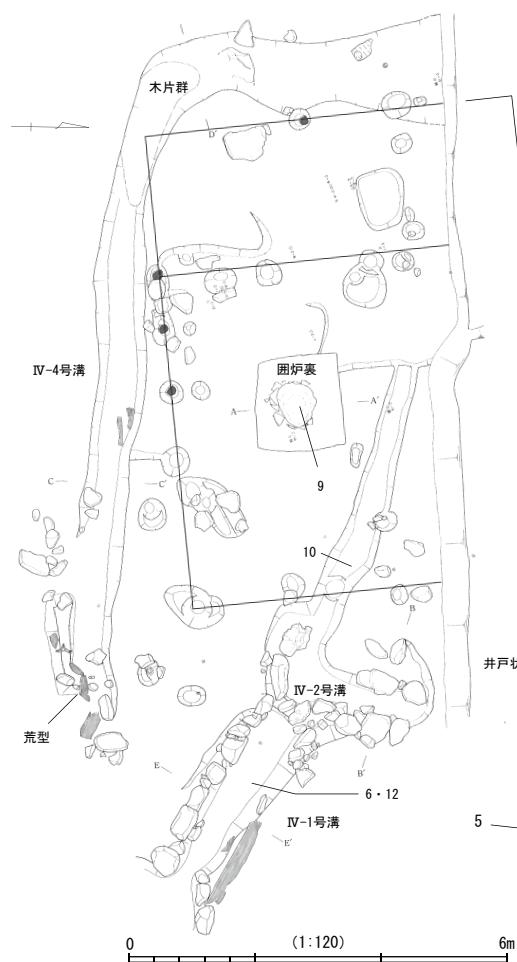




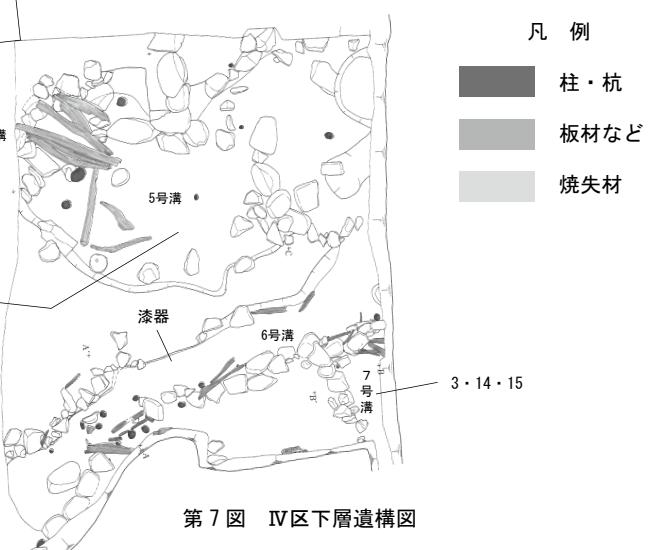
第4図 第3次I・II区全体図



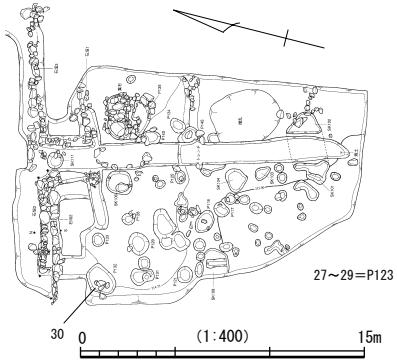
第5図 第4次調査(III・IV区)全体図



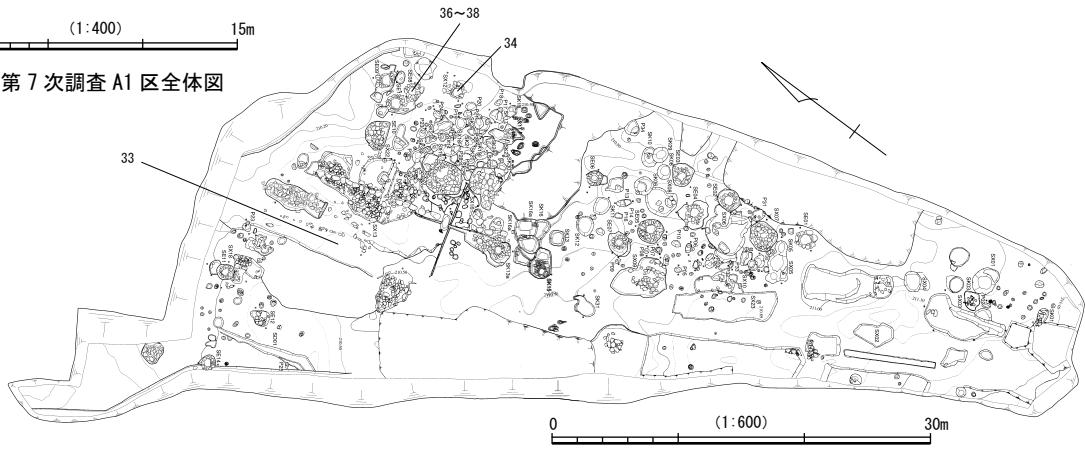
第6図 木地師の建物跡



第7図 IV区下層遺構図



第8図 第7次調査A1区全体図



第9図 第10次調査左岸地区全体図

焼けた建築部材が定量廃棄(第7図)されており、この建物は火災にあったとされている。IV区下層5・6号溝には杭を打ち込んで板材で水路の石を護岸していたようである。建物の北東側には、井戸状遺構や溝(IV区下層、第7図)が存在し、荒型(第10図3・5・6)や鉋砥石(9・10・11)、漆器(12・14)が出土している。しかし、両者の位置関係が明確にされていなかったので、原図を確認して石垣ポイントをもとに合成したのが、第6・7図の位置関係である。IV-2号溝と5号溝は繋がる可能性が判明したが、建物の北側は保存区域となったので、調査は未了のままである。

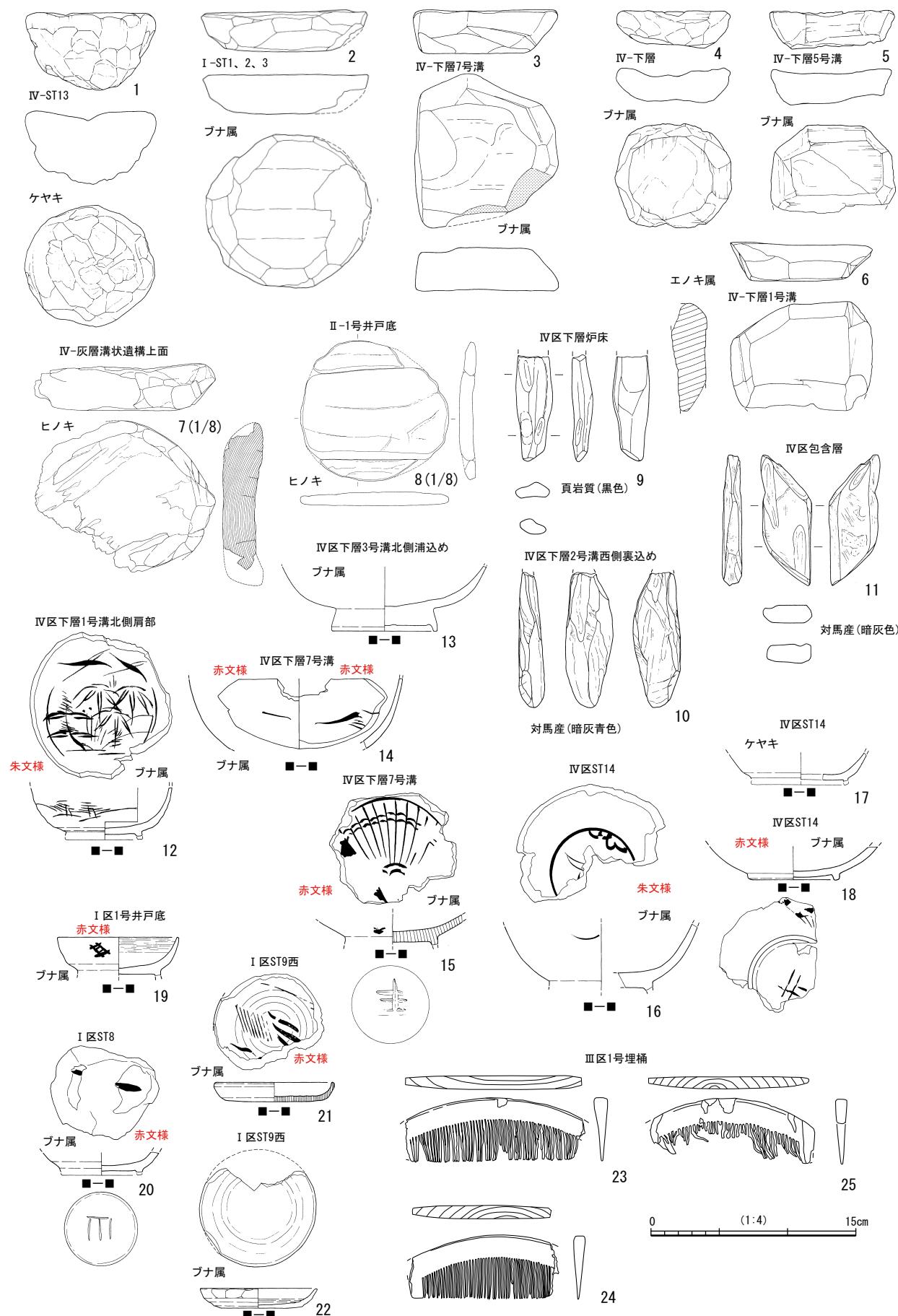
荒型は、IV区下層(第10図4・7)や工房北側のI・II区(第4図、第10図2・8)からも出土している。荒型の殆どがブナ属であり、ケヤキ・エノキ属も確認される。荒型は2段階が想定され、それより荒いもの(報告572マツ属複維管亜属・573ヒノキ)は荒型ではない可能性が想定されている(林2005)。縦木取りは第10図1(ケヤキ)だけであるが、1は芯持ち材なのでロクロ挽きには向かない材である。また、下端が尖ったままなので挽物の荒型としてはもう1段階加工が必要である。7は図正面が焼けており、板目である。8も板目であり、正面に四角い焼コゲが3つある。7・8とも挽物には向かない材と木取りである。

またIV区4号溝から、残材(クリ)が多く出土しており、荒型以外の木材加工も想定されている(宮川2006)。荒型の残材とされた報告593・594(クリ)は、他の部材加工時の残材であろう。

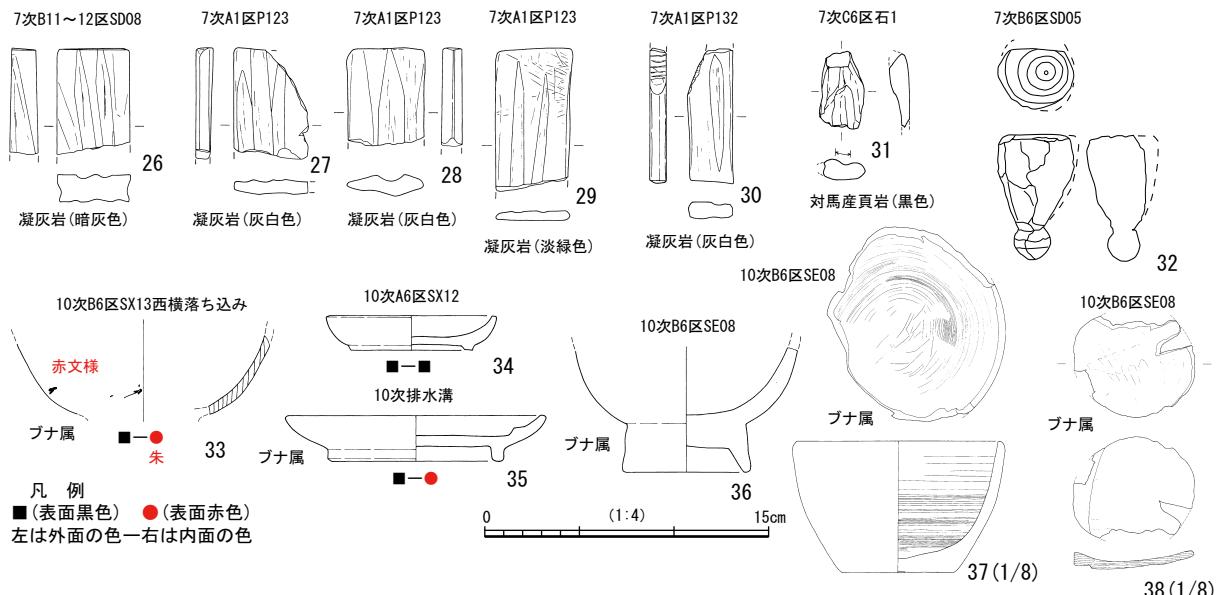
第10図7はIV区灰層状遺構上面出土の大型の荒型(ヒノキ)である。II区1号井(江戸時代)出土の8はヒノキであり、表面に四角い炭化痕が3つ列を持つようなので、荒型というよりは盆であろうか。

鉋砥石は、第7次調査で6点報告(第11図26~31)され、丘陵裾のA1区(第8図)に4点が纏まって出土し、第11図30(P132)、27~29(P123)がある。川沿いのC6区包含層(第11図31)、III区のSD08(第11図26)でも出土している(第12図)。

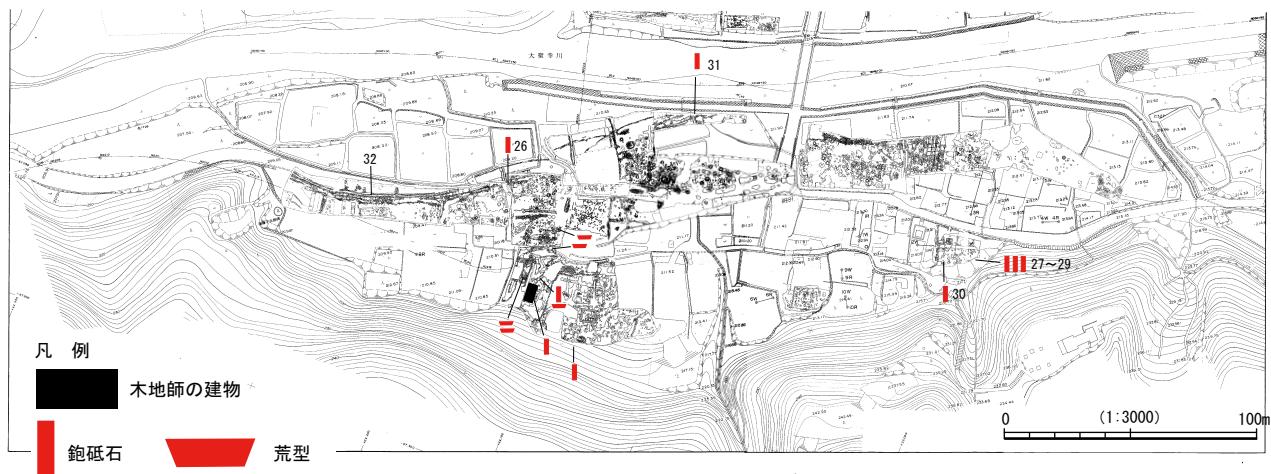
漆器などは、三浦ほか2005で第10図12~22、藤田ほか2006で第11図33~36が報告され、片面漆塗りの38、ロクロ挽の鉢37が報告されている。19・33~38は江戸時代であり、他は戦国期であろう。第12図は大聖寺川左岸調査区の遺構全体図であり、荒型と鉋砥石の出土位置をプロットした。第3・4次調査区で木



第10図 九谷A遺跡出土漆器関係遺物など1



第11図 九谷A遺跡出土漆器関係遺物など2



第12図 九谷A遺跡左岸地区全体図

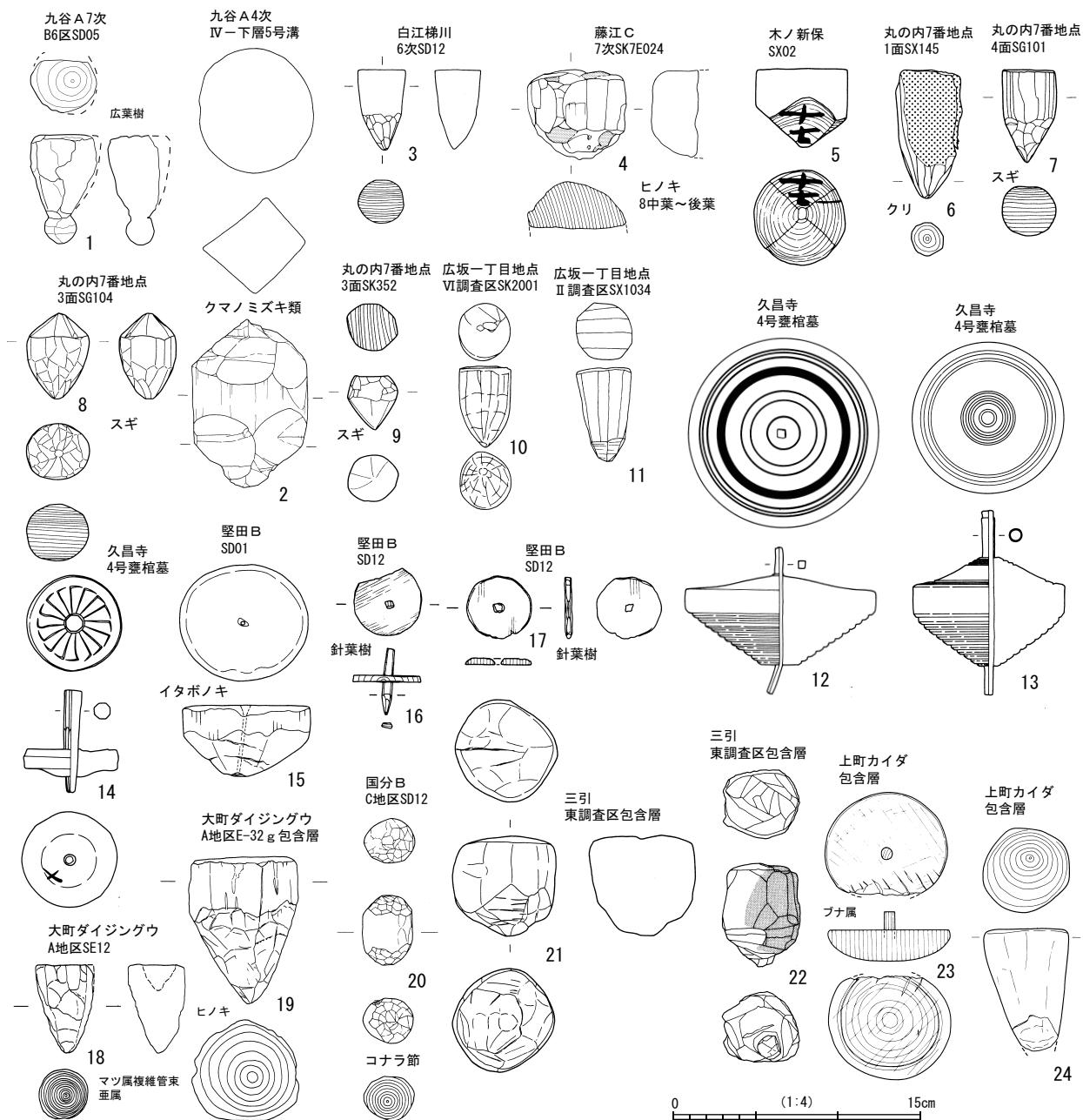
地師工房と荒型・鉋砥石が、第7次調査A1区で鉋砥石が纏まって出土しており、木地師工房は山側に立地していた可能性がある。しかし、荒型は保存状態により、調査時には残っていない可能性が高い。また、漆器・砥石なども細片ならば調査・整理担当者も気が付かないまま未報告の資料もある。よって、報告された資料のみで断定すべきではない。

3 未報告木製品の紹介

第10図23~25は第3次調査Ⅲ-1号埋桶出土の横櫛であり、遺構は江戸時代前期以降(近代)の便槽(第5図)と思われる。底隅から櫛2本・鎌柄3本が出土し、鎌柄が報告(三浦ほか2005第142図532~534)されている。第10図23~25のラベルは九谷A3次Ⅲ区1号埋桶鎌柄・クシ960711であり、3点とも全体的に残りが悪く、25が特に酷い(第13図)。広葉樹の白木を利用し、芯を外して本体を作り出している。23は残存幅130mm・長さ46mm・厚さ10mm、24は残存幅107mm・長さ46mm・厚さ9mm、25は残存幅119mm・長さ46mm・厚さ8mmである。石川県内出土の横櫛は、樹種はイスノキが多く、中世以降ではカバノキ属・ハンノキ亜属・ツツジ属・ネジキ属・ヒノキ・ブナ属などが確認(久田2012)されるのでイスノキの可能性があろう。



第13図 九谷A遺跡の未報告木製品写真



第14図 県内出土の独楽

第11図32は第10次調査B-6区SD05出土である。所見は独楽と判断し、外面右側と裏側を欠損するが、長さ65mm、残存幅39mm、残存厚さ31mmである。広葉樹の芯持ち材を利用し、先端は丸い玉状に仕上げている。しかし、図では上側左右の形がアンバランスである。

4 県内出土の独楽について

九谷A遺跡の未報告木製品の中に独楽と思われる第11図32を確認したので、県内出土の独楽を集めてみた(第14図)。同じ九谷A遺跡の荒型(第14図2)は、芯持ち材で下側は四角形にケズリ出しており、独楽か毬の未製品であろうか。第14図12~17・23は回転軸を持つ独楽であり、他は叩き独楽である。叩き独楽は、芯持ち材を利用するもの(5・6・10・18~20・24)と辺材利用するもの(3・4・7~9・11・21~23)がある。辺材利用の3・7~9・11は結物(桶など)の栓を転用している可能性がある。芯持ち材は、クリ(6)・ヒノキ(19)・スギか(24)・マツ属複維管束亜属(18)・広葉樹(1)・不明(10)がある。回転軸を持つ12~17があり、14は土器製である。16・17は曲物底・蓋板を転用したものと思われる。16の台は芯去り材(写真を基に筆者加筆)を利用しているが、17は柾目板を利用している。

今回、第14図1を見たときに、直感的に叩き独楽と判断したが、時間の限られた中で県内の独楽を集めると、同じタイプのものが無いことを確認した。よって、第14図1は人形などの可能性も想定される。時間の限られた中、集めて報告したので漏れや間違いも多いと思われることから、今後ご教示などを頂きたい。

第1表 県内出土の独楽

番号	遺跡名	報告番号	出土位置	時期	樹種	長さ	幅	厚さ	備考
1	九谷A		7次B6区SD05	近世以降	広葉樹	65	(39)	(31)	芯持ち
2	九谷A	586	IV区下層5号溝	16後半	ガマノミズキ類	102	70	76	芯持ち。下面は4面加工
3	白江梯川	W73	6次SD12	17前半~19	不明	49	26	26	
4	藤江C	229	7次SK7E024	8世紀中~後葉	ヒノキ	54.5	60	(28)	
5	木ノ新保	W493	SX02	近世	不明	36	42	42	芯持ち、十七の墨書
6	丸の内7番地点	83	1面SX145	17後半~19	クリ	78	(40)	(35)	芯持ち
7	丸の内7番地点	550	4面SG101	16後半~17初頭	スギ	57	33	30	
8	丸の内7番地点	274	3面SG104	17初頭~前半	スギ	52	37	35	
9	丸の内7番地点	363	3面SK352	17初頭~前半	スギ	33	30	28	
10	広坂一丁目地点	215	II-SX1034	19第2四半期	不明	57	36	22	辺材
11	広坂一丁目地点	116	VI-SK2001	近世	不明	49	33		芯持ち
12	久昌寺	15	4号甕棺	17後半~18後半	不明	36:62	78	78	黒文様、鉄製軸
13	久昌寺	16	4号甕棺	17後半~18後半	不明	44:75	75	75	漆塗。鉄製軸、上部は真鍮板を巻付
14	久昌寺	14	4号甕棺	17後半~18後半	土器	9:42	39	39	軸は木製、墨書あり
15	堅田B	770	SD01	13中葉~後葉	イボタノキ	43	77	67	中心に穿孔、モクレン属?
16	堅田B	1066	SD12	13中葉~14後半	針葉樹	40	40	(40)	軸あり、台は芯去り材
17	堅田B	1067	SD12	13中葉~14後半	針葉樹	4	42	40	軸孔は方形
18	大町ダイジングウ	124	SE20	15後半~16前半	マツ属複維管束亜属	53	36	35	芯持ち
19	大町ダイジングウ	589	A地区包含層	14後半~18前半	ヒノキ	89	66	61	芯持ち
21	国分B	120	C地区SD12	12	コナラ節	43	30	27	芯持ち
22	三引	321	東調査区包	古代~中世	スギか	64	47	42	一部炭化、辺材
22	三引	322	東調査区包	古代~中世	クヌギ節かコナラ節	61	62	61	辺材
23	上町カイダ	1414		中世	ブナ属	30	74	(63)	辺材、軸は別材
24	上町カイダ	1332		中世	スギか	(74)	52	54	芯持ち、年輪は密

5 まとめにかえて

報告書が刊行された資料は、公開可能な状況であるが整理・報告担当者でなければ実見することは殆どないのが普通である。筆者はたまたま職場の再整理業務で担当した資料の中で未報告資料を確認し、本稿を表すことにした。

その結果、叩き独楽の中には芯材と辺材を利用したものがあること、叩き独楽が栓と認識されている事例が多いこと、樽の栓を再利用したものを確認した。今後、栓とした木製品の中で芯持ち材や先端を加工したものは用途を再検討すべきことを提示したい。

本稿をまとめるにあたり、荒木麻理子、池田 拓、伊藤雅文、伊藤好美、高橋 敦、中村早百合、中山由美、横山純子氏の協力を得た。

参考文献

- 大西 顕ほか 2002 『藤江C遺跡Ⅶ』 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
木立雅朗ほか 1991 『上町カイダ遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター
楠 正勝ほか 2006 『広坂遺跡(1丁目)Ⅲ(近世編1)』 金沢市埋蔵文化財センター
楠 正勝ほか 2007 『広坂遺跡(1丁目)Ⅳ(近世編2)』 金沢市埋蔵文化財センター
滝川重徳ほか 2003 『三引遺跡I(上層編1)』 (財)石川県埋蔵文化財センター
谷口宗治・向井裕知 2004 『堅田B遺跡Ⅱ』 金沢市埋蔵文化財センター
出越茂和ほか 2004 『久昌寺遺跡』 金沢市埋蔵文化財センター
柄木英道ほか 2002 『木ノ新保遺跡』 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
布尾和史ほか 2014 『国分遺跡・国分B遺跡』 石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター
林 大智 2005 「木製品」『九谷A遺跡I』 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
林 大智ほか 2019 『大町ダイジングウ遺跡』 石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター
久田正弘 2012 「中部・日本海側」『木の考古学』海青社
藤田邦雄ほか 2006 『九谷A遺跡II』 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
藤田邦雄ほか 2011 『白江梯川遺跡III』 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
三浦純夫ほか 2005 『九谷A遺跡I』 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
宮川勝次 2006 「木製品」『九谷A遺跡II』 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
安中哲徳ほか 2014 『金沢城下町遺跡(丸の内7番地点)I』 石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター